

和歌山城下町 地名の由来

和歌山市は城下町として栄えてきました。私たちの住むところの地名をみてみると、なぜそのように呼ばれるようになったのかと、思うことがあります。調べてみると、和歌山の城下町は、概ね、徳川家が入った時に町並みがほぼ出来上がったようです。武家屋敷のあった宇治、広瀬、岡、吹上と、町屋が大部分の内町、北新町、新町、湊の八区域に分かれます。今回は、新町の地名を見ていきます。



新町編

① 新雑賀町

新雑賀町の対岸にあり、新町に位置することが由来となります。「雑賀橋」は「新町橋」(続風土記)とも、雑賀町東の水野安房守屋敷裏手なので「裏橋」とも言われました。「鈴丸橋」は、安藤家中屋敷の前なので「中屋敷橋」とも(和歌山城下町絵図)、東詰の角に竹問屋があったため「竹屋橋」とも称されました。

② 南雑賀町

新雑賀町の南に続く町であることから称されます。対岸が三木町堀詰あたり、市場があったため「元市場」とも呼ばれました。(続風土記)

③ 北休賀町

元は、御材木町と言ったようです。(紀伊名所図会)慶長年間浅野家の家臣平塚因幡守が広の戦死後、弟の為景が当地に隠棲して休賀居士と称したことが由来です。休賀は小倉の光恩寺の信譽上人に帰依し、火除けを願ひ念仏を怠らなかつたので、休賀居士の木鉦を町内の宝とし、毎年3月29日に町民が鎮火の念仏を唱えたといえます。(続風土記)町の南に休賀が淵と称する方10間ほどの池がありました。(紀伊名所図会)

④ 南休賀町

この町の北に続く南休賀町と北休賀町を「御材木町」としたのでそれに対する町名と思われる。文政13年(1830)の御触書写(道成寺文書)に新通一丁目〜三丁目船場と呼ばれていたところが、南材木町1丁目〜三丁目に改称したと記されています。大橋から紺屋橋付近にかけては、近隣からの青物集積地や木材の荷揚げ場となっていました。一丁目の川縁に郭公松(ほととぎすまつ)という名松があり、医師黒岩道碩の妻にまつわる伝説がありました。(紀伊名所図会)

⑤ 南材木町

⑥ 新通

元、一丁目を「山東屋(さんとうや)町」。二丁目を「葎(よしず)町」。三丁目を「捻金(ねじかね)町」。四・五丁目を「松の木町」と呼んだと伝えられます。(続風土記)一丁目の雑賀屋某の店は、紀州名産の孫六織足袋を製造して、紀州紋羽織発展の基礎となりました。



⑦ 新中通

新通に平行する町で、元、一丁目を「茶屋町」二丁目を「五器や丁」三丁目を「土之湯屋之丁」四丁目を「下之湯屋之丁」五丁目を「籠屋丁」。六丁目を「蒔絵屋之丁」と称していて、その職人達が住んでいたと思われます。

⑧ 茶屋町

茶口前役所が設置されていたことに由来します。茶町とも新茶町とも呼んだと伝えられています。

⑨ 新八百屋町

広瀬八百屋町に対して新町の八百屋集住地であったことに由来します。

⑩ 木挽丁

木挽き職人が集住したことに由来すると思われれます。

⑪ 数奇屋丁

江戸時代初め、御数奇屋坊主が居住したことに由来します。

⑫ 毛革屋丁

江戸時代の初め御用毛皮商人が居住していたことに由来すると思われれますが不詳。水道が、町内南部から大橋南部まで通っていました。



郭公松の図(紀伊名所図会)